

で、父の好物だった日本酒を大地に注ぎ、母の遺影を置く。そして涙ながらに、父と同じような運命をたどった御霊に精いっぱいの讚美歌を捧げた。

墓標一本建てることもできない私たちの力なき。こんな後ろ髪を引かれる思いで機上の人となり、あれから月日は流れて行った。それでも、まだ国の墓標が建てられる夢を抱きつづけている旅人である。

満州から新中国での青春

広島県 和田 欣二

まえがき

過酷な体験の記憶も、歳月と共に薄れていくが、終戦直後の満州で、狂乱の辺境の地よりの逃避行で、多くの人々が命を落とされ家族離散の末に残留孤児や、残留婦人などとしての戦後がいまだに残され、多くの体験記録も書かれている。

そのほかに、中国に抑留され数年を経て帰国した人

たちも、人命を失う危機的な状況は回避されてはいるものの、行動や言論の自由を束縛されて、望郷の思いに涙した体験は忘れ難いものである。

私も戦後八年を経て帰国できたが、この体験をこのまま忘れ去ることはいかにも悔しく、記録として書き残しておきたい気持ちにかられて、五十数年余り前の記憶を、たどりたどりして書き始めた。

新天地、満州へ

昭和十六年春、父の再婚と同時に新しい母と妹を含め親子四人で、父の勤務地の満州に渡り北満の哈爾濱に着いたが、春とはいえ日本に比べあまりの寒さに震えあがったのが第一印象で、果てしなく続く荒野にはいい知れぬ寂しさを感じたものだった。

父は、一般軍属として現地の軍関係に勤務していたが二年ほどで退職し、現在の藩陽より少し南下した南芬(図1)という小さな町の鉄鉱石を産出している会社にて、友人の誘いで転職した。

ここには四、五百人の日本人家族がいて、小さいながら国民小学校もあり、生徒数も百人余りいたように

記憶している。

ここでの生活は、一応平穩な暮らしで生活物資も不足なく配給されており、戦時下の緊迫感さはほど伝わってこなかった。時折くるニュース映画を、小学校で大勢の人と一緒に見ては勝ち戦に歓声を上げていた。

しかし、防空訓練とか銃剣術の訓練などが学科に取り入れられ、自分たちの将来は、軍人になるべきものと決められており、次第に軍事色が濃くなってきた。

母親たちも、消火訓練でバケツリレーや、救助訓練をしたり、出征兵士に送る千人針や慰問袋を縫出で作ったりしていた。確かな戦況が分からないだけに不安な緊迫感に包まれていた。

やがて、米軍のB29爆撃機が数機、はるか高空を悠々と奥地を目指して飛来するようになり、戦争も南方前線での玉砕の知らせが入り、戦況のただならぬ様子を感じたが、何か巨大な怪物を相手に戦っているのではないかと思つた。

青天の霹靂の敗走

昭和二十年の八月になったある日、伝令の人が「駅

に入った汽車が大変だ」と叫んで回つた。急いで駅に行く、屋根のない貨物列車数十両に、こぼれるほどに日本人の男女子供が乗っており、そのいづれも、見るも哀れなほどぼろぼろな服装に、防空頭巾をかぶり、顔は汽車のすすで真っ黒になって疲れ果てた顔をしていた。汽車は、機関車に給水するため駅に止まつたと分かつたのだが、駅に行つた私たちを見ると、いっせいに汚れた手を差し伸べて水をくれとせがんだ。ソ連軍が、国境を越えて攻撃してきたので、命からがら逃げてきた開拓団の人たちだそうだ。中には、子供を見捨ててきたと悲嘆にくれているお母さんたちもいた。

まさに青天の霹靂であつた。ぼうぜんとして、目の前の現実の戦争の姿を見て鳥肌が立った。何人かの人、社宅にとつて帰し「ヤカン」を持って十五分ほどかかる駅に急いだ。駅の水くみ場を何度往復したろうか。

涙を流しながら感謝され、汽車が動き出したときに、あるお母さんが別れ際に、やさしく「あなたたち

も早く逃げなさいよ」と言った言葉が胸に残った。行き先は北朝鮮との国境の町、現在の丹東だそうだ。

それからというものは、毎日のように避難列車が通って行くのが見えた。

この駅が、機関車の給水所になっていたために、列車が止まるたびにヤカンでの水くみが続いた。そんなときにある大人から、水くみもお金をもらえと言われたが、「こんな姿の我々から銭を取るのか」と悲痛な声で叫ばれ胸にずんとこたえ、その日以来駅に行くのをやめたが、心残りであった。

終戦の恐怖

終戦の玉音放送を聞き、大人たちはパニックになっていた。頼みの兵隊さんの姿は、いつの間にか消えていて、今更、自力で日本に向けて帰るのにも鉄道は止まり、そのほかの交通手段もなく、ただ成り行きを見つめていた。

たちまち食糧が欠乏してきて、現地人の農家に行つて衣類などと食糧の物々交換をして飢えをしのぐ日々だった。

数日して一キロメートルぐらい北に見える汽車のトンネルからごう音を響かせながら、ソ連軍の戦車が出てきた。銃を構えたソ連兵も続々と現れたが、みんなはただかたずをのんで成り行きを見つめているだけだった。

ソ連兵は、我々日本人だけが集団で住んでいる団地を日指してきた。女、子供は隠れろと団地内は大混乱となったが、未知のソ連兵の侵入で、どのような悲惨な事態になることかと、震えながら様子を見守っていた。しかし、彼らの目的は少し違っていった。一応武装解除で武器の提出と、線路や工場の設備の解体運搬の使役をするよう命令され、男性全員が、毎日使役に出て行き、線路のレールや工場の設備のすべてを解体して、貨車に積み込んだ。その代わり少しではあるが食糧が支給され、ほっとしたのもつかの間、数日間解体積み込みが終わると彼らは、さっさと引き上げしまった。この駅から南の方向には一切手をつけずに、そのままに行つたのは不可解だった。

人的被害はまったく受けなかったわけだが、彼らが

帰ると団地はまったく無防備な状態になり、今度は現地人の暴徒と戦うことになった。幸いに団地は高台にあり、入り口も少なく守りやすく、数度の来襲も、相手の武器や人数の少なさもあって戦わずして撃退できた。

まもなくして中国八路軍が入ってきた。彼らは、団地を包囲して徹底した武器類の提出を求め、軍刀などはすべて取り上げてしまった。それから駅前広場で、現地人で日本軍に協力した人たちの人民裁判が毎日のように行われ、銃殺刑の音が聞こえた。団地の日本人の中にも数人が逮捕連行され、そのまま帰ってこなかった。いわゆる中国人を虐待していた人たちだ。みんないつ報復されるのかと、戦々恐々として成り行きを見守っていた。しかし、きちんと規則を守り、整然とした兵隊の行動には予想外の驚きで、戦前教えられていた匪賊、馬賊のたぐいとは全く違って、厳粛な姿には感動した。

未知なる移動

もちろん、治安も一気に正常になり、むしろ戦前よ

りも安全になっていた。やがて八路軍より通達があった。「中国の復興に協力してくれるのなら衣食住と生命の安全は保障するがどうか」とのことだった。食糧も底をつき、先のこととはまったくわからない今は、ただ生きていくための選択をした。近くの町には、内戦中の相手の国府軍が進攻してきて、砲撃の音が近くに聞こえてきたし、急ぎ移動することになった。ほんの数組の家族しか申し出なかったようで、残留組とお互いの幸運を祈りながら惜別した。

北朝鮮との国境の町、丹東に一カ月余り滞在した。ここには、千五百人余りの日本人避難民が、帰国の日を待つて集まっていたようで、かなり残酷な仕打ちを受けていたということを手記で読んだ。私たちとはまったく接触がなくて、この町にいる日本人は、私たちだけだと思っていた。

国境の鴨緑江を遡上

私たちは、八路軍に保護されていたので、どこに行っても虐待されることはなかった。ちょうど台風の影響だと思うが、大水が出て町中水浸しになっていた。

やがて数家族二十人余りが、四、五隻の十人乗り程度の木造船に分乗して、国境の河の鴨緑江を船で一週間かけて遡上し、水豊ダムのある拉古哨という町の製材所に移動した。

しかし河をさかのぼってゆくにしても、船にはエンジンがなく、六、七人の船頭がロープで岸沿いに引っ張っていくわけだが、ちょうど大雨で河は増水して、水流も速く大変な道中だったが、やがて川幅いっぱい巨大なダムが見えてきた。増水した水は、ダムの最上部からダムの姿が隠れるほどにあふれて、その大音響により話し声などは耳元でないと聞こえず、夜などは、水音と地響きで、なかなか寝付かれずみんな睡眠不足になっていた。さすがの魚も、ダムの上から落ちると気絶するようで、大きな鯉や鮒が、腹を返して流れて来るのを、地元の人が「たも」ですくっていた。ここには、八路軍の野戦病院があり、多くの兵隊が駐屯していた。

この地で数カ月間働いていたが、国府軍が攻めてきたので河を渡り北朝鮮側に逃げた。

この渡河の最中の銃撃戦で、我々と行動を共にしていた数人の八路軍関係者が戦死したが、幸いに我々日本人は全員無事だった。前夜のうちに渡っていた女性や子供の私たちは、北朝鮮側の河岸で夜を過ごし、朝になり父たちの脱出を待っていると、五百メートルほどの対岸に見える部落の手前に、ジープを先頭に数百人の国府軍の歩兵部隊が現れた。わずかな撃ち合いで簡単に部落に突入していった。間一髪、岸を離れた父たちを乗せた船を見て、国府軍の兵隊が数人、岸辺に走り出て船を目がけて自動小銃を乱射した。流れ弾が、こちらの岸辺の岩肌は無数跳ね返り、あわてて岩陰に隠れながら、船が一刻も早く脱出するよう必死で祈った。

やがて北朝鮮の警備兵が走ってきて、危ないからとトラックに乗せてもらい町の集会所みたいな所に連れて行かれた。父たち日本人十人余りは、船の喫水線より下の船底に身を伏せているように言われたので助かったが、木造船は銃弾で穴だらけになり、多くの戦死者を出した。

父たちは、身辺に体験した実戦の恐怖と悲惨さに、数日間は寡黙であった。

昨日までは戦争の主役だった我々が、今日は同じ民族同士が戦う内戦の傍観者となっていた。しかも我々は標的でないという奇妙な立場であったが、もしここで国府軍に収容されれば、日本に送還される道をたどっていたかもしれない、紙一重の運命に翻ろうされていた。

苦難の逃避行

一応の危機は脱しようだが、ここは北朝鮮、いわゆる不法入国というわけで、しかも我々が日本人ということを、絶対に悟られないようにということで、十日余り滞在したが、外には一步も出ることではできなかった。

ある夜中に突然移動することになり、こっそりと駅に行き汽車に乗せられ出発した。客車の窓は、厳重に覆いをして外を見ることはできなかった。真夜中に大きな駅に着いたようで、何本もの線路があり、たくさんの貨物列車が止まっていた。今度は、その貨物列車

の中の貨車に乗り換えることになった。

我々が乗ると同時に、どこからともなく百人余りの日本人家族が現れて大急ぎで乗せられた。貨車の中はたちまちいっぱいになり、座っているのがやつの状態のぎゅうぎゅう詰めになった。警備の兵隊も、緊張して銃を構えてしきりにあたりを警戒していた。

突然のことで、ただ安然していると、引率の軍人が「貨車の都合がつかず窮屈な思いをさせるが、我慢してくれ」と言った。どうやらこの駅にかなりの日本人が集められていたようだった。乗り込んできた人たちが、ここは朝鮮の平壤という駅で、ここが日本に一番近く、だれか一緒に逃げないかと誘っていたが、今更、終戦時の切迫した気持ちになっての逃避行をする気力はだれにもなかった。

ここでの逃げるチャンスは恐ろしくなかったと思うが、自分の人生で何度目かの岐路だったと思った。汽車は、次の目的地に着くのに一週間かかったが、満員の貨車の中は横になることもできず、夜はそのままの姿で寝るわけで、体が折り重なって寝ていた。今

回は食事が大変で、真っ青にカビが生えた中国の饅頭が一日に四個と、ゆでたジャガイモが二、三個の配給だった。

緊急な移動続きで食糧の手配がつかず、辛抱してくれとのことだった。饅頭は、カビを取り除くと、白いところは梅干しぐらいの大きさしか残らず、まったく腹の足しにはならず、そのまま全部食べたが不思議と食あたりはしなかった。一週間ものあいだ毎日のカビ饅頭には限界すら感じた。トイレ休憩は、人家のない所に汽車を止めては野原での大急ぎだった。

しかし、小便のときは止めてもらえずに、バケツを回しては用を足していたが、ときには貨車の揺れで中身がこぼれることもあり、必ずだれかの頭にかかり、洗うこともできずに車内は異様なにおいになっていた。護衛の兵隊たちも、貨車は別だが食事は同じ物を食べていて、互いに苦しい思いをしていた。

別便の貨車の連中は、連日ゆでタマゴだけの食事で、一週間もするとタマゴの黄身で顔が黄色になっていた。果たしてどちらがよかっただろうか、とにかく

食べ物があっただけよしと思うことにした。

朝鮮族との暮らし

やがて汽車が着いた所は、国境近くの中国領内の長白という地名で朝鮮族の集落だった。

ここで、朝鮮人の農家に分散して泊まることになったが、結局は二カ月余りの間お世話になってしまった。最初の食事では、餓鬼のようになって食べていたそうだ。私たち家族が世話になった家の主人は、少し日本語を話せる人であった。

私たち一家は歓待されて、朝鮮料理の数々や、民族舞踊などを見せてもらったりした。私は、毎夜のように朝鮮の民話を聞かせてもらって、民族の習慣や、大人が子供をしつける様子などを知った。特にしつければ日本人家庭より厳しく、上下のけじめを徹底的に体験させていたのには敬服したが、なによりも驚いたのは、我々には白米のご飯を出して、彼らは粗末な粟のご飯を食べていたことだ。恐縮して訳を尋ねると、ちゃんとお金はもらっているし、お米のご飯を出すよう言われているということだった。例のカビ饅頭のおわ

びかなと思った。

あるとき部落で弔いがあり、見学させてもらった。

プロの泣き女たちがいて、泣くほどよい弔いになるのだそうだ。日ごろの我々の外出は厳しく禁止され、部落の数カ所に監視所があり警戒をしていた。一体この部落に何人の日本人がいるのか、まったく分からなかった。我々の不安をよそに朝鮮の家族は、いろいろと珍しい暮らし方を見せてくれた。

元氣をつけてあげようと、肉料理をたらふくいただいた。あとであれば赤犬の肉だと言われ、ショック状態になったこともあった。しかし赤犬の肉は、薬になり大変に珍重されていて、それを食べさせてもらうということは、よほど歓待されていたわけだ。近所に、誇らしげに赤犬を軒下に何日もつり下げている家があったのには閉口したが、お願いして下ろしてもらった。

冬の朝鮮家庭の圧巻は、やはり朝鮮漬けの仕込みだが、朝鮮漬けの仕込みには、それぞれの家の先祖伝来の秘伝があり、親せきを含め家内総出の作業で何日も

かかる大仕事だが、家長の指図のもとに各自が分担してテキパキと作業を進行していく。指図をする家長の権限はとても強く、親せきの長老といえどもここでは逆らえないそうだ。しかし、家中トウガラシの粉で赤くなり、私は目にしみて大変な思いをした。

極寒の国境を渡る

やがて突然に移動命令が出て、一時間以内に集合、出発という軍隊調子だった。

お礼を言うのもそこそこに、あたふたと別れたのが今だに心残りだ。出発は夜中で、すっかり凍結した豆満江を今度は朝鮮側に渡ることになった。荷物と小さな子供だけは馬車に乗せて、絶対に声は出してはいけないということ、ただ黙々と河を歩いて渡った。

とても寒く、夜空に北斗七星が手に届くほどの近さに見えた。寒さで体温が下がると睡魔が襲い、歩きながら幾度も雪の中に倒れた。星明かりの中とはいえ、一度はぐれたら捜すことは不可能だったと思う。それからは、客車に乗せられ雪の荒野をひた走りに走ったが、どれくらい家族が乗っているかさえ分からな

った。

中国領の東端の図們駅に着いてはじめて警戒が解除され、車窓から外を見ることができた。どうやら北を指しているようで寂しい気持ちになったが、汽車は牡丹江を過ぎ哈爾濱に着いた。早いもので戦後二年目の師走になっていた。かつて戦前に二年余り過ごした町でとても懐かしかった。

しかし、サイコロゲームの遊びで振り出しに戻ったような感じで、これまで無為に過ごした数年間の悔しさが込み上げてきた。父もかつて住んでいた街に、許しを得て警備の兵士と共に見に行ったが、戦禍でかなり荒れて昔の面影はなかったそうだ。この辺で、どうやら我々の浮草暮らしも終わりになるらしい話だ。ここ哈爾濱に以前住んだ経験がある私たちに、初めての人たちが、不安な様子でこの街のことをいろいろと聞きにきた。

鎮魂の地、鶏西へ

ここには二週間ほど滞在して、いよいよそれぞれの最終目的地向けて分散して行くことになった。もち

ろん行き先を選ぶ自由はなく、言われるがままに分けられていった。久しぶりに時間があつたので、お互いの幸運を祈り再会を誓った別れをすることができた。私たちは、数家族と数人の若い元兵隊さんたちと、こゝまで我々を引率してきた責任者の劉主任や、数人の八路軍兵士も一緒に行くこととなり、不安な思いも少しやわらいだ。

私たちを乗せた汽車は、さらに東(ソ連との国境)に向かつて行き、車窓からは、至る所にソ連軍の侵攻で破壊され焼きつくされた民家や施設が、当時のままに放置されているのが見えてきた。それも東に行くほどひどい状態になっていった。この奥地には、開拓団の集落や炭鉱の施設があり、多くの日本人がいたようで、当時の悲惨な状況が想像され重苦しい気持ちに襲われ、みんな寡黙になりただ見つめているだけだった。

二日ほどで、目的地に着いた。荒野の中の小さな駅には鶏寧(現在の鶏西へ図2)と書いてあつた。かつてこの鉄路伝いに、多くの日本人がソ連軍に追われ

不幸にして命を落とされた。草むす屍となつていった数知れぬ人々の靈魂が、再びやつてきた私たちを出迎えてくれているような気配を感じた。おめおめと生き永らえこの地にやつてきた気恥ずかしさを覚え、思わず合掌をした。

後日、僧侶経験者に読経をしてもらい、みんなでささやかながら野辺の送りをさせてもらい、やっと気持ち落ち着いた。

その後も、時折山野に花などを取りに行くと、だれとも知れぬ「しゃれこうべ」を見つけることがあり、丁寧に土に埋め花を手向けておいた。

現地の人たちが、避難の途中死んでいった多くの日本人の最期の様子を話してくれたが、なかでも三百五十人余りの婦女子が機関銃で集団自決した話は、胸の詰まる思いで聞いたが、よくもあんな無残なことをしたものだ、やはりお前たちは日本の鬼だと厳しくなじられた。事の真偽のほどは分からないが、戦後初めて聞いた悲惨な話である。もう一つの話は、この駅より北の東安の駅で、千人近い日本人が乗った列車が、

ソ連軍の戦車に砲撃されほとんど死んだという話だった。

最近読んだ手記に書いてあったが、前者の事件はやはり事実で、麻山という土地で犠牲者も四百二十人余りだったことと、自決現場は言語に絶する悲惨な様子で、戦後三十数年、中国当局により埋葬されるまで白骨に覆われた丘は白く見えていたそうだ。現在は慰霊碑も建てられ残留日本婦人の方が、お墓の清掃をされているそうだ。

後日、当局に、自決現場に行き事実の確認と弔いをしてほしいと申し出たときは許可されなかったが、もし許されて現場に行っていたら、おそらく人間性が変わっていたかもしれないと思う。

我々は、事件現場よりわずか六十キロメートル余りの所に、六年間もいたのかと思ひ浮かべながら手記を読んでいると、胸がつまり読み切ることができなかつた。

もう一つの事件は、昭和二十年八月に東安駅で、日本軍による大量の弾薬の爆破処理作業中に、千人余り

の避難民を乗せた貨物列車が通り合わせ、大爆発に遭遇して、貨物列車は転覆炎上し、多数の死者と行方不明者を出したという事件だが、あまり語り継がれていない。

自決現場で生き残った数人の子供が、中国人に保護されたという話も事実で、その後我々が所在を尋ねると、「あんな残虐な行爲をする日本人には絶対に教えることはできない。我々の手で大切に育てていく」と、地面にツバを吐きながら叫ばれ、返す言葉もなかった。

復興への始まり

現地では、すっかり焼け落ちた発電所や、機械工場の復旧工事が始まった。

この地域全体では、食糧が不足している様で、トウモロコシの実と小豆が少々と、青大根の漬物や大豆が配給されたが、最悪のときにはトウモロコシの粉をお湯で溶かし岩塩で味をつけたものを、一日に茶碗二杯というときもあった。

若い元兵隊さんに「いつか日本に帰ったときに、君

らが小学校五年中退では、まともな仕事には就けないよ」と言われ、なんとか勉強をせねばと思っていた。幸いに、現地の中国人が英語と代数学の教科書を持っていたのを分けてもらい、ポロポロの教科書であったが薬にもする思いで友達と二人で習った。必死に習ったお陰で日本に帰国後、定時制高校の受験では数学は楽々なくらい先に進んでいたようだった。

ある日、壊れたビルの中の小さな風呂の修理ができて二年ぶりに入ることができた。生活は、毎日寒空の下での新代わりの枯れ草集めで、空腹と、手足のあかぎれには、悲鳴をあげる日々だった。五月ごろになると少しは暖かくなり、雑草が伸びてきたすと「アカザ」という草の葉をほうれん草代わりに食べて栄養をつけることができた。ある日、何人かの兵隊さんが連れてこられたが、そのうちの一人が、ひどい下痢にかかってやせ衰えており、薬もなくただ見守るだけだったが、もう助かるまいと現地人から一握りのお米をもらい、お粥を作って食べさせたが、日本に帰ったようだと喜んでくれた。しかし、一口食べるのがやっと

で、間もなく絞り出すような声で、「お母さん」とひと言叫ぶと静かに息を引き取った。戦友が、「お前の骨は必ず日本のお袋さんに届けるぞ」と叫んでいた。

許可をもらい丘の上で茶毘に付した。夜中に消火の確認に丘に行くと、真っ暗な中で青白いリンが燃えて付近がぼんやりと明るく光っていて、怖くてそれ以上近寄ることができなかった。幸いにして現地にいる間で亡くなったのはその人だけだった。

残留孤児

あるとき、一人の男の子が連れて来られた。年は私と同じぐらいだったが、残留孤児なので日本人たちの手で育ててくれとのことだったが、日本語をすっかり忘れていたのには驚いた。わずか数年で言葉を忘れるものだろうか、少し疑っていた。

本人は、よほどの衝撃に合ったようで、孤児になった当時のことは覚えていないので、一緒に遊んでいることも時折なにかを思い出そうとぼんやりとしていることがあった。私も、一步間違えば同じ運命をたどっていたかもしれないと思うと背筋が寒くなってきた。彼に

は、みんながなんとか勉強を教えようとしたが、なぜか、彼は頑として習おうとしなかったが、言葉だけは思い出すような早さで覚えていき、今度は逆に大人たちの通訳をするようになった。

私も十四歳の時、年齢を十六歳とごまかして会社で採用してもらい、機械現場の小笠原さんという日本人の職人の弟子として働くことになった。ほかに多くの中国人で同じ年代の弟子が働いていたが、差別もなく同じように対応してくれた。

仕事の合い間に少数のグループに分かれて中国語の教育を受けたり、八路軍所属の日本人兵士の人が講師になって、社会主義のマルクス、レーニンなどの教育を受けたが、日本語の活字の本を配られたのには驚いた。これだけちゃんと用意されていることは、いまだに多くの日本人が残留していることだと思った。教育は拒むことができなかった。拒めば「思想改造」とかいう収容所があるとかで、ちょっと怖い感じだった。

不思議なことに、時々ある日ふっと、ひと家族全員とか、一人二人といなくなることがあった。聞けば適

材適所に配置されたのだ、との返事だが真実は分らなかった。

うわさでは、反革命分子として処罰されたとか、思想に関する言動には厳しい対応がされていたようだ。

現場では、約一年半ほど弟子をした後、独立した工員になりそれぞれに機械を与えられて一人で作業をするようになった。もちろん給料も増え、仕事も楽しいものになったし、会社も一時の混乱を乗り切りひと息入れた状態になった。

我々日本人も、やっと身の回りを見渡せるようになった。このころになって、文才のある兵隊さんが、自分たちの体験談を『兵隊物語』の題名で書いた。娯楽のないときなので大変な人気になり、ぼろぼろになるまで回覧され読まれたが、次々に続編が出され、みんなが集まっておもしろい体験談を話して記事になっていた。

しかし、当局から内容が墮落していると言われて発行禁止となった。

故郷の便り

やがて日本との文通が許可されて、内地の肉親の便りを若い兵隊さんたちは号泣して読んでいた。手紙は、検閲を受けているようで、内容も当たり障りのない文面になっていた。私たちは、身内のいる広島は原爆で廃墟となり市内の住所にはだれもいないだろうと、手紙を出すことをあきらめていた。

やがて雑誌の『平凡』が届けられたときには、みんな一斉に歓喜の声を上げて、むさぼるように読んだ。祖国の復興の様子は、戦争で壊滅した状態を想像していた我々を、大いに元気づけてくれた。

雑誌には、祖国日本のおいを感じ、戦後の復興の姿を記事や写真で見ると、ますます一日も早く帰りたい気持ちにかられた。広島島の原爆のキノコ雲の写真を見たときには、帰る町は完全に消えていると、沈痛な気持ちになった。

職場の中国人の同僚たちも、やがて原爆のことを知り、広島出身の私に「帰る故郷がなければ、ここに永住し我々と一緒に暮らそう」と元気づけてくれた。し

かしこれらの雑誌にも、思想的によくないとクレームがつき、やがて届かなくなった。雑誌に載っていた、戦後の流行歌に音符がついていたのを練習し、歌いはじめた。ここでの一番人気の歌は「異国の丘」で、まるで我々のために作られた歌のようで、みんなで合唱し涙がとめどなく流れ、殊に若い兵隊さんが、大地に伏して母を呼ぶ姿には涙を誘うものがあった。こうやって思い切り泣くと、しばらくは気持ちの高ぶりが治まり、いつものように働くことができるものだった。無論、シベリアに抑留され過酷な労働に従事している人々のことなどは知る由もなく、不幸なのは自分たちだけだと思っていた。思えば戦後の悲劇の中では、割合に幸運な抑留生活を送っていたような気がする。

手作り演芸会

今度は、元氣づけに芝居でもやろうかという話になり、当局の許可を得た。題名は「流れの三度笠」という時代劇と「ガラクタバンド」という手作りの鳴らない楽器での口演奏や、婦人たちの盆踊りなどで、脚本

作りから、大道具・小道具の製作には、総動員で何カ月もかかった。特に、竹の材料や銀紙がなく、チャンバラの刀作りには一番苦心したようだった。演劇の練習は、秘密で最後まで見ることができず、それだけ開演が楽しみだった。それでも時々当局のチェックがあり、思想がらみの内容は削除されていた。いよいよ開演の運びとなり、職場の中国人同僚を招待したのだが、演劇の内容の解説をしてくれと言われ、当日は身振り手振りの説明に追われて芝居を落ち着いて見ることはできなかったが、手作りの演劇は大盛会に終わった。

残留婦人のこと

ある日、二人の二十歳代の日本人女性が連れて来られ、われわれと一緒に暮らすことになった。今でいう残留婦人で、今までの経緯は一切話さず、かなりおびえていたが、次第に落ち着きを取り戻し、一人はまもなく若い男性と結婚した。

もう一人の女性には、ここ鶏西より更に奥地の東安から、中年の日本人男性が見合いをしにきて、縁談が

まとまり結婚の運びとなった。当局の粋な計らいに、一同は大喜びし盛大に見送った。

彼女は、字が読めないのか日本から送られてきた雑誌『平凡』をせがまれて度々読んであげたが、時折涙を浮かべて聞いていた。彼女が嫁いでしばらくしてから、子供ができたという知らせが入った。

密告と人民裁判

ある日の早朝、突然数人の兵士が我が家に乱入してきて、訳も言わずに父を連れて行った。私たちには、家から出るなど言い、訳が分からずただ恐ろしくて家でじっとしていると、昼前に、公安局の広場で人民裁判があるそうで、父もそこで裁判にかけられるようだという話が入ってきた。裁判には七人がかけられ、即決裁判で数人が即座に銃殺刑にされ、身の毛のよだつ銃声が響いたが、どうか父でありませぬようにと必死に祈っていた。

やがて当局の公安員が訪れてきて、訳を説明してくれた。父が、戦前軍関係に勤めていたことが罪名で、懲役五年の判決が出て直ちに収容所に送られたとのこ

とで、収容所の場所は教えられず、また面会などではできないとのこと、なお家族には何の責任もないと告げられた。よかった、よかった、取りあえず生きていくことが分かった。残酷な人民裁判にかけられてよくぞ助かったとほっとした。しかし気がつくとも、周りの日本人たちはだれ一人駆け付けてくれず、「触らぬ神に祟りなし」の態度で素知らぬ顔だった。ただぼうぜんとしていた。明日からどうしよう、残された親子二人で話した……これからどうすればよいのか……。

生きれるだけ生きて行こう

当然答えは出なかったが、翌日私は、会社に行くことにした。一目散に現場に行った。現場では、朝の集会が始まっていたが、僕が出動したので早速に昨日の裁判のことがみんなに説明されたが、最後に職場のリーダーが、「父の罪は息子の和田には何の関係もない。今までどおり一緒に働いてもらおう。今日はよく勇氣をもって出勤してくれた、元氣を出して働いてくれ」と激励された。周りの同僚からも、肩をたたいて元氣を出せと声をかけられ、涙が出るほど嬉しかった。母に

今日の出来事を話し、父が帰るまでなんとか頑張って生きていこうと誓いあった。

後日、会社の上司がこっそり話してくれたが、「我々中国人は決して君の父を密告してはいない」と言われた。そして言葉を続け、「君たち親子が暮らして行くためにも、決して密告者を捜してはいけない」と忠告してくれた。

がく然とした。逆境の中でお互いに助け合いながら暮らしていたのに同じ日本人に密告されるとは、時々寄り合っではお互いの身の上話に花を咲かせていたのを密告するとは、許すわけにはいかない、いつか必ず見つけてやると心に決めていた。

時折まだ密告者を捜しているのかと聞かれることがあったが、黙って返事をしなかった。

中国人になりきって

父のこと以来お互いに疑心暗鬼になり、心を割って話をするとはなくなり、私も会社の中国人の同僚とだけ付き合うことにして、バスケットボールのチームに入ったり、週末に開かれる社内のダンスパーティー

などに積極的に参加した。たくさんいる日本人の中でただ一人参加していた私は、みんなからかわいがられ何事をするにも必ず声をかけてくれた。

そのころ、朝鮮戦争が始まっていたが、ある日突然にアメリカ軍が中朝国境付近まで進攻してきた。「北朝鮮人民が危ない、中国人民は総力を挙げて援護しよう」のスローガンを掲げ、職場では義援金の募金とか、義勇兵への志願とかが叫ばれた。

橋梁に使うボルトなどの突貫生産に入り、機械職場では昼夜三交替のフル生産が二カ月余り続き、生産目標を達成した我々は晴れがましく表彰された。会社にはソ連製の新鋭機械も大量に入荷し、会社も一段と整備されていった。

職場では、戦後初の女性工員を職場進出させるための技術習得訓練が始まり、我々若手職人のところに弟子として二十人余りの十六、七歳のかわいい女の子たちが入ってきて、我々青年工に一人ずつ配置されたときには、思春期真っ盛りの我々にとってはしどろもどろだった。養成期間は六カ月の期限付きなので、無我

夢中で機械の操作などを教えたが、ちょっとしかればすぐ泣き、あまい顔をすればすぐ甘えてくる姑娘クニヤンには、当時十七歳の我々青年工にとっては最大の危機だった。

しかも週末のダンスパーティーには、師匠の我々が必ず連れて来るように厳命されていたが、中国青年男女の習慣など分からず、しかも弟子の女の子は、私が日本人だということはどうしても信用せず、日本語のうまい中国人と想っていたようで、ちょっと気を許すと恋愛関係の雰囲気になってしまうのは閉口した。帰国直前までに、二人の女子工員を教育したが、日本人とはつきり知ったとき、泣かれたのには困った。

望郷の夢が咲く

会社の復興も一段落し、食べ物も次第によくなり人心も落ち着いてくると、我々の間には再び望郷の思いが沸き上がって、酒の勢いを借りては、憂さを晴らすようになってきた。

「コックリさん」という占いで、帰国できる日を占っては、はかない望みを託し、いつも近いうちに帰国

できるといふ卦が出て、だれも疑いもせず、ときめいていた。

昭和二十八年、戦後八年目の初夏のある日、待ちに待っていた帰国命令が出た。知らせにきた人が、狂ったように叫んで回っていた。体が硬直し頭の中が真っ白になった。

帰国申請の手続きなどをするとときに、この地域に残留孤児がいれば、一緒に連れて帰ろうと当局に申請したが、許可されず思いを残しての帰国となった。しかし、これより四十三年後の平成八年に、この孤児たちが肉親を訪ねて訪日したではないか。毎回の訪日記事は欠かさず見ていたが、あまりにも年月がたち過ぎている。記憶も乏しく訪ねる肉親も見つからず、四十三年前一緒に帰っていればと思うと残念でならなかった。

帰国が始まり数組に別れて次々と出発していき、最後から二番目にやっと帰国通知がきたが、途中で中止になりはせぬかと気が気ではなかった。会社で退職金として人民幣をもらったが、出国時に香港ドルに替え

ると約五百香港ドルであった。荷物の制限があり一人にバックが一個だけ、しかも途中で前後三回の荷物の検査を受けた。検査は、服の襟の部分をもんで、中に何か縫い込んでいないかを調べるほどの厳しさで、書き物は何であれ一切禁止で、写真も背景が入っているものや、中国人が写っているものは、切り除かないと持ち帰ることはできず、思い出となる物は持ち帰れなかった。

帰国の当日、駅に行くとき会社の上司やダンスクラブの楽団が全員勢揃いして、私のために歓送の演奏をしてくれたのには、驚きと感謝で涙がとめどもなく流れ、この数年間の苦勞が一挙に消える思いだった。

しかも、道中の警護と世話のために専属の添乗員がいて、とても親切丁寧で絶えず「御苦勞さまでした」の言葉を使つてのねぎらいには、こちらが恐縮するほどだった。牡丹江の町で二週間ほど、各地から集まって来る日本人を待った。集まってきた人たちは農村部にいたそうで、すぐく生活に疲れ果てた感じでぼろぼろになっており、中国の悪口ばかり言っていた。私た

ちのゆったりとした姿を見て、どこでどれほどよい待遇を受けていたのかと、恨めしげに言われた。苦勞したのは自分たちだけだと思っていたので驚いた。次いで、瀋陽に行き約十日ほど滞在し、最終集合地の天津に着いた。乗船までの数日間は、朝・昼・晩の三食を市内の大飯店に食べに行くのだが、三食とも超豪華な中華料理のもてなしに、すっかり中華料理のファンになってしまった。

乗船・一路平安

街でみんなは、土産の買い物をしていよいよ乗船となった。船は「興安丸」と書いてあり、大きな船体にわくわくした。書類審査を受けタラップを上りきるまでの間、息を止めていたような気がした。日本人の船員さんが並んで出迎え、笑顔で「長い間御苦勞さんでした」と声をかけられたときには、これでやっと日本に帰れるのだと思つて一度に緊張が解けて腰がへなへなとなりよろめいてしまった。

やがて船は岸壁を離れたが、見送りは税関の係員数人だけだった。船上は声ひとつなくみんなじつと離れ

ていく中国の大陸を見つめていた。今までのことが、走馬灯の様に頭の中を駆け巡った。父を残しての帰国が唯一の心残りで、涙が止まらなかった。

しばらく小型警備艇が伴走していたが、係員が手を振りながら離れて行き、海の色が黄色と青色の境目にさしかかった時、船内放送で、「ただいま本船は、中国領海外に出ました。これより一路舞鶴港を目指して帰ります」と、確かこの様に言ったと思う。満員の船内から一斉に「バンザイ」の声が沸き上がり、躍り上がって何回叫んだろうか。思想関係で厳しいチェックをされていた人たちが叫んでいた、「もう自由だ」と。乗船間際まで、思想的に問題があれば乗船はいつでも止められるぞと威張っていた人たちの姿は、いつの間にかどこかに隠れて見えなくなっていた。船の中の初めの食事、お国の匂いが漂ってきておもわず涙。

祖国のぬくもり

舞鶴港の岸壁に着くまでの数時間のことは、記憶から消えてしまった。「興安丸」のタラップを下りるときは、宙に浮いていた。通路の両側いっぱいの人

垣の中を、上の空で歩いて行くと、「広島県」と書いた看板が目に入った。数人の人が、口々に「お帰りなさい！ 御苦労さまでした！」と言って出迎えてくれたが、県職員の人たちがわざわざ舞鶴までできてくれて、広島まで一緒に世話をしてくれるということには驚いた。船から降りたらそこで解散して、自力で広島まで帰ることになるだろうと思っていたので、こんなに温かい出迎えを受けようとは考えてもおらず、戸惑うばかりだった。

帰郷先を聞かれたとき真っ先に、原爆でやられた町の様子を聞いてみた。職員の人には、こやかに笑みをみせながら、「すっかり復興しているよ」と言われたが、そのときには思わず目頭が熱くなってきた。

市内の一画に引揚者住宅が準備されていたが、生活必需品一式が揃えてあり、更に、当座の生活資金までも支給された。思ってもいなかった厚遇に、しみじみと日本に帰ってきて本当によかったとみんな涙を流したものだ。

祖国は私たちを見捨ててはいなかったのだという安

らぎを心の底から感じた。そしてその気持ちを忘れず
に今日まで生きてきたのだった。